

どろんどろんと
コミュニケーション

鳥羽マルシェ

Vol.96

第62回式年遷宮は、8年の歳月と570億円の費用をかけて無事終わりました。今回のような賑わいは、長い遷宮の歴史の中で、かつてなかったのではないのでしょうか。2013年に伊勢神宮を訪れた人は1,400万人を超え、まさに史上空前の賑わいとなりました。観光業を主たる産業としている鳥羽市にとって、「お伊勢さんのご遷宮」は20年に一度、元氣付けのために打ってもらえるカンフル剤のように有り難い事業となっています。

しかし、有り難がつてばかりいるわけにはいきません。最近、よく耳にするのが、「これからどのくらい観光客が減少してゆくのだろう」という心配です。今までの前例をみても、まず減少してゆくのは間違いないところでしょ。その減少をいかに小さなものにするかということが関係者の願いであり、私たちに課せられた使命であると思います。これまでも他の市町に負けないだけの予算を観光誘客のためにつぎ込みつつ、観光業関係者や市の職員も努力をしてきたところです。

しかし今後は、「お伊勢さんにおんぶにだっこ」だけでなく、鳥羽に来ていただくだけの魅力を鳥羽につくっていかねければなりません。その第一弾が、先日事業組合を立ち上げた「鳥羽マルシェ」

ということになります。佐田浜にオープンするこの農水産物の直売所とレストランは、国内でも初となる漁協と農協の対等出資により運営されることとなりました。ちよつと欲張りではありますが、鳥羽マルシェを活用して、農業、漁業の振興を図るとともに、観光客を増やす。そして市民が楽しんで憩うことができる快適空間をつくっていききたいと考えています。

佐田浜は交通の便がよく、景色のきれいな所です。この恵まれた地区を「鳥羽市民喜び、遠き客来たる」と言われるようなエリアにしていきたいと思っています。

もちろん市が関与する施設です。市内の民間事業者に与える影響についてもよく考える必要があります。その点は私自身も心配しているところです。しかし、守りの姿勢では将来の発展は見込めないと考え決断しました。

「鳥羽マルシェ」が多くの入で賑わい、そこで様々な情報を発信し、市内の他の店舗や観光施設が同じように状況を呈するという共栄の夢を見たいと思っています。

南三陸町

復興応援記



Vol.3

復興への願い

派遣職員 松岡孝治

南三陸町へ派遣されてから早いもので10か月が経ちました。この間、住まいを高台に移す防災集団移転事業の完成第1号である団地造成が完了し、目に見える形の復興は、徐々に進んでいます。しかし、仮設住宅に住んでいる町民のかたは1,786世帯で5,357人もおり、「普通の暮らし」に戻れるのは、まだまだ先の状況です。

さて、こちらではお正月になると、家には、鯛やエビ、宝船など縁起物をかたどった切り紙が飾られます。この切り紙は「きりこ」と呼ばれるもので、神社の宮司

が代々伝わる型紙をもとに和紙を切り抜いて作ります。早いところではお盆過ぎから製作に取り掛かります。そして、大晦日に「きりこ」を飾り新年を迎えます。

「きりこ」は江戸時代中期からの伝統とされ、複雑な絵柄でかたどられています。その形状は、同じ三陸地方南部でもデザインの傾向が異なるようですが、いずれも漁の安全と豊漁の願いが込められており、神棚などに一年を通して「きりこ」を飾る家も多くあります。また、復興への願いを込め「きりこ」をモチーフにしたメッセージボードも町内に設置されています。



「きりこ」をモチーフにしたメッセージボード

その復興への願いを受け止めながら、南三陸町のみなさんを支えていきます。